

# 神山町の「からうす」

民俗班（徳島民俗学会） 青木 幾男<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

「からうす」は米麦の精白具である。からうすを抜きにして、穀物の精白を語るができない程全国で使っていたものであって、どんな山村でも昭和20年代までは使用しており、そして昭和40年（1965）ごろまでは農家の土間に遊休機具として残存しているのを見かけることもしばしばであった。そのからうすを今はまったく見ることができない。

今回阿波学会第46回総合学術調査に於て、民具学的には貴重な体験を得ることができた。それは民具を通して「人と物のかかわりを追及するなかで民具保存の認識を改めなければならない」ことを痛感したからであった。

民具研究と資料保存の声が上がってから年久しい。しかし1基のからうすの調査の中でとりくんだ苦悩と努力も大きかった。それを報告するとともに、「民具は残しやすい物を各資料館が個々に収集すればよいのではない。行政的に、計画的に種類を選択し、必要なものは国家的な保存を考えねば、千年の悔いを将来に残すことになる。今が一番大切な時である」と提言し、報告とする。

## 2. 「峠型からうす」の発見

平成4年7月28日阿波学会第36回三好町調査の時、三好町立資料館に1基のからうすがあった（図1）。私たちが従来見てきた「からうす」（図2A）とは少し違っている。図1と図2の違いは棹の後半にある。図1のものは棹の後半にある。図1のものは棹の上に人が乗って踏むしくみで、棹の上面が広く、「ほろろ」から後方にすべり止めのキザミがあり、天井から身体を安定させる綱がつるしてある。「ほろろ」から後方は1m以内である。図2Aは筆者が管理する敷地資料館のものであるが、この型のものは「ほろろ」から後方を細く長くするために、中程から後方を別材で継いである場合が多い。これを

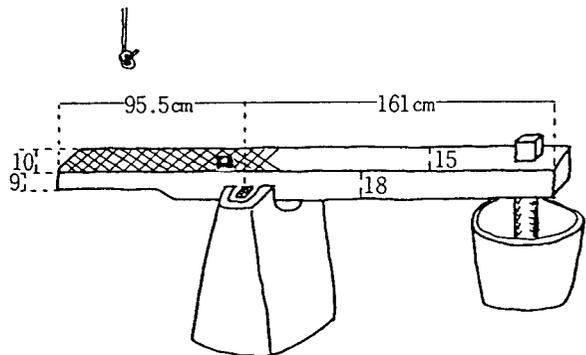


図1 三好町資料館展示「からうす」

1) 麻植郡鴨島町敷地964

「つぎ棹」と言っている。つぎ棹でなくても後半を軽くするために細く造り出している。図2型はいずれも後方に鳥居形の支えと棹の後尾(端)を踏むための「踏台」があって、台上の人が支えで上半身をささえ、片足で棹の端を踏むと杵が上がり、足を放すと杵が落ちて臼の中を搗くことになる。図2型は全国に普及している「からうす」である。そこで図1型の疑問を解くために、図1型を「峠型」とし、図2型を「平地型」として分類してその広がり調べた。三好町は吉野川の北岸にあって平地が少なく、山は傾斜が急できび

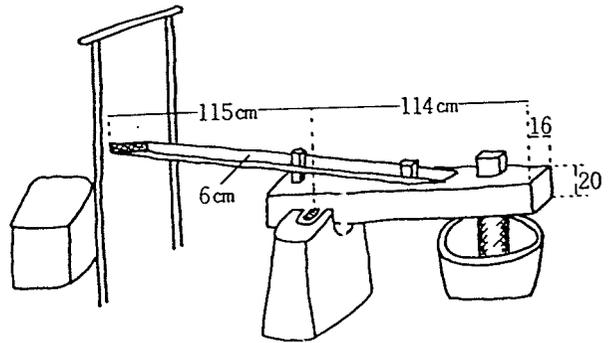


図2-A 敷地資料館保管 松材「からうす」

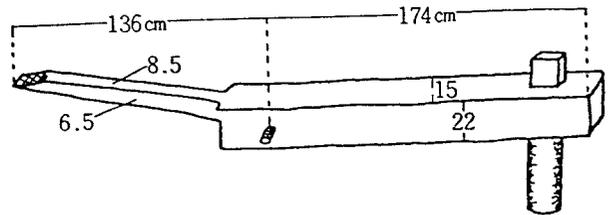


図2-B 敷地資料館保管 ケヤキ造り「からうす」棹

しく、峠に続く所々に人家が点在する。県境の大川山(1,042m)には大川神社があり、大川神社に通じる道は、古来から塩の道・金比羅信仰の道とも言われてきた。また峠につづく香川県仲南町の村落は、三好町の人たちの通婚圏であったこともわかった。峠を下りて、7月29日仲南町の教育委員会資料室を訪ねて見ると「峠型からうす」を1基保存していた(図3)。この年の12月までに確認できたのは三好町と、香川県仲南町の2基だけであった。峠型と平地型の図をもって近隣の町村をまわったが、そのころ「からうす」はすでにどこにも残っていなかった。中年の人は「からうす」という物さえ知らない人が多くなった。しかし80歳前後の人は「最近まであったのだが」などと言って「峠型」を使っていたことを教えてくれた。12月の発表会までに三好町から池田町・三野町のほか、吉野川を渡り、井川町・三加茂町・半田町・両祖谷山村と、阿波上郡西部の山村がすべて峠型を使っていたことを聞くことができたが、からうすは見ることができなかつた。県外で仲南町に近い香川県善通寺市をはじめ、西条市・松山市・高知市・広島県宇品市・青森県小川原民俗博物館のからうすも、すべて平地型であった。

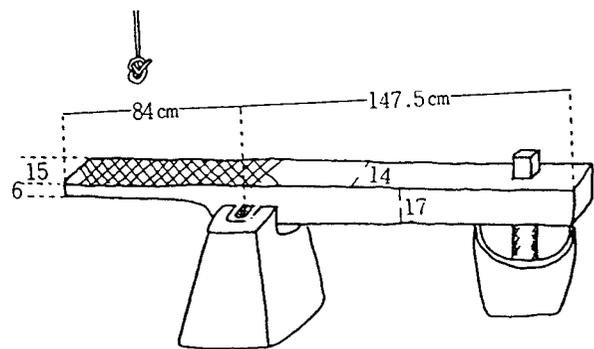


図3 香川県仲南町教育委員会保管 「からうす」

峠型からうすは、聞き取り調査で使っていたというものの、その理由も分布の範囲もわからないままに「古代の塩の道」と重なる地域に「他とは違ったからうすがあった」と報告して、峠型の解明はその後の調査でつづけることにした<sup>1</sup>。今回の報告はその結論にも似たものである。

### 3. からうすの研究

からうすの研究はあまりすすんでいない。最近では農具辞典・民俗辞典・民具辞典などがあるが、どの本にも「からうすは<sup>もみすり</sup>朶臼・踏臼の2種類があり」と書いてある。中には「『大から臼』という踏臼あり」とする本もあり、どんなからうすを言うのか説明もなく、民具に関するかぎり時代が下がるほど用語と字義の関係があいまいになり、研究の理解を複雑にしている。若い研究者が「からうす」と「すりうす」を混同させている場合もある。からうすの研究には、正徳2年（1712）に大阪の医師寺島良安が書いた『和漢三才図会』（巻35農具類）<sup>2</sup>が参考になるが、同書には

「品名 碓（からうす） 和名 加羅宇須（からうす）」とある。

棹にはめこんだ杵を「碓の<sup>からうす くちばし</sup>髻」といい、棹を貫いて横に出ている短い木を<sup>くるる</sup>枢機（からくり）とし、これを「保呂<sup>ほろ</sup>」という（徳島では「ほろろ」という）。

「碓」を考案した雍父（養父）、「水碓」を作った后稷（こうしょく）は『諸橋大漢和辞典』によれば黄帝施政のころの人で、漢字がつくられたころの人物とされている。

「碓の作り方」の中で「瓶の口を少し外側に向けて埋める」とあるのは大変大切な事であって、臼の方向は臼底の高さ、軸（ほろろ）の高さ・杵先（碓のくちばし）の方向と一致しなければならない。その角度は一つも同じものはない。からうす・ひきうす・たうすなど、臼はすべて同じ理屈が通用する。からうすの「棹」は「ほろろ」を中心に円形運動で上下している。棹が落下した時、杵の下面は水平でなく、地中の臼底の高さと地上のほろろを軸とした高さの違いから、杵の先は約10度前後の傾きをもっている。臼を杵の落下方向に合わせなければ穀物が自由にひるがえらない。最近の各資料館では臼を地上に置いているが、本来は地に埋めなければ、からうすにならない。

上田萬年編（大正六年、啓成社発行）『大字典』1597頁、碓の項に「碓－物をウスヅク意。春とも書く。臼に同訓異義あり。碓・臼・碾・磑・磨・礮の別あり。碾は引きウスの上・磑は下・磨は通じて引きウスをいう・礮は唐ウス・臼はツキウス・碓はカラウス・名物六帖につまびらかなり」と記されている<sup>3</sup>。

### 4. 「阿波上郡」と「峠型からうす」

三好町調査から8年の歳月をかけて峠型からうすの解明をつづけたことになる。第44回

の井川町調査では平成9年9月20日、井川町井内2880萩原晴巳さん（68歳）にあって多くのことを知ることができた。萩原さんが住む上野住地区は小学校の分校を約100mも下に見る約700mの場所にあった。萩原さんはからうすのことについて「私達が使っていたのは全部峠型であった。峠型が楽だから使うのだが、下郡の人が平地型を何故使うのか、その気持ちが分からない。」と話してくれた。上郡の人と、<sup>しもごおり</sup>下郡の体質が違うのだと考えてその姿勢を図にかいて萩原さんに教えてもらった。しかし使っていたという井川町では、ついにはからうすを見ることができなかつた。きびしい傾斜に、耕作する人も、<sup>やまくわ</sup>山鉾をつくる人も少なくなっていると聞きながら報告を書いた<sup>4</sup>。

つづいて平成10年7月28日第45回穴吹町調査で穴吹町支納285の向井昌利さん（74歳）が納屋の2階に「からうす」の棹を大切に保管して居られるのを知って調査したところ、峠型であった（図4）。これで峠型からうすが上郡東部にも及んでいることが判明した<sup>5</sup>。

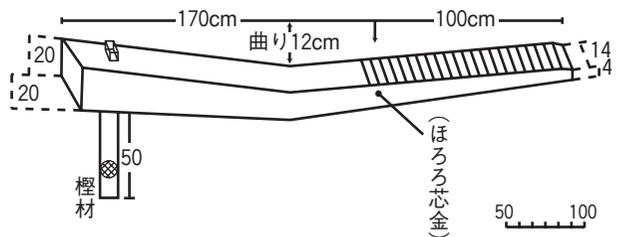


図4 穴吹町のからうす

従来上郡文化圏は吉野川文化圏と異質のものだとは考えていなかった。阿波国といわれた徳島県面積（4,145km<sup>2</sup>）<sup>6</sup>を三分して、<sup>みなみかた</sup>南方といわれる太平洋沿岸と、<sup>きたがた</sup>北方7郡といわれる吉野川沿線の上流2郡を「上郡」（図5）、下流5郡を「下郡」と呼んだが、政治的にも古代からほぼ同じ支配者に支配され、とくに阿波北方、すなわち吉野川沿いは葉藍<sup>あい</sup>の生産地であったので、吉野川を通じて荷物の積出しや人の出入りも多く、民俗的にも言語にも違ったところは見られず、阿波の民俗文化は徳島から海・小船を通じて支流の奥地まで伝えられたと考えられていた。そのため、吉野川文化圏の中に峠型からうす

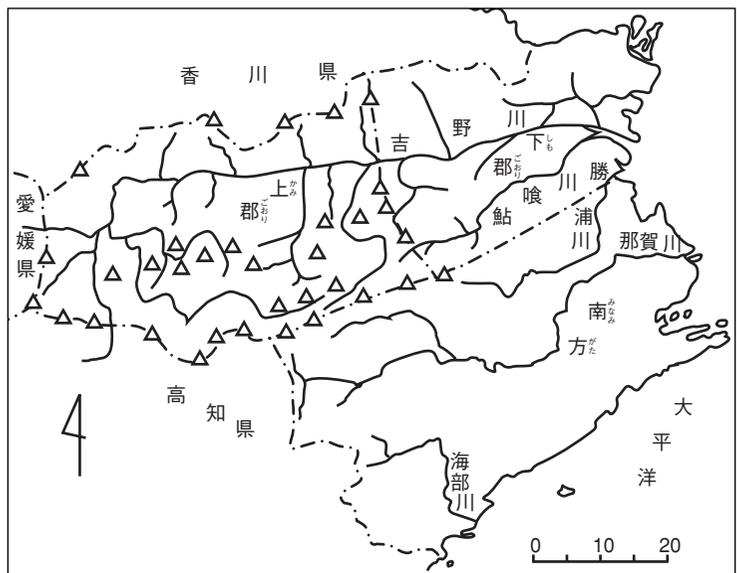


図5 南方、上郡、下郡の範囲

の存在する理由がわからなかった。

平成11年9月6日神山町下分字城河内中山馨さん（76歳）宅でからうす（図6）を確認した。三好町、仲南町、穴吹町に次ぐ4基目の「峠型からうす」である。しかし資料館に移動したからうすは、

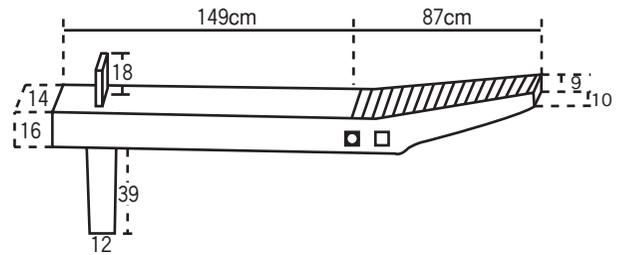


図6 中山家のからうす

部品を寄せ集めたものもあり、機能効果が正確ではないので、同年12月5日の総合学術調査報告会では「阿波上郡文化の中に峠型からうすがある。それは全国でもこの地域独自のものであり、古代からの厳しい環境の中でつくりあげてきた体質的なものに関する」と報告した<sup>7</sup>。

この報告会の前に、峠型が他県にもあるかどうかを確認するために、民具研究の先輩や知己をたよって、鹿児島県から青森県まで30通のアンケートに、峠型と平地型の図を書き、地域でどちらを使っていたかを御教示いただくよう10月はじめに投函した。「からうすがない」という答もあり、からうすの存在が確認できたのは半数程であったが、青森県三戸市の田仲忠三郎元稽古館館長・横浜市日限山の河野道明神奈川大学教授・福井県美浜町在住の民具研究家小林一男氏・岡山県山陽町在住の歳森茂元四国民具研究会会長・島根県松江市の勝部正郊元中四国民具学会会長その他から長文の手紙や大部の参考資料の送付を受け、親切に教示をいただいた。しかし、峠型からうすを思わせるものはみられなかったので、峠型からうすは「阿波上郡」独自のものであり、それをつくりあげた原因は、上郡を包む多くの山岳であるとした。

阿波上郡は図5で示すように阿波国の西北に位置し、吉野川の中流域を占め、徳島県の面積の約1/3強、その周囲はすべて高い山で囲まれている。香川県境には讃岐山脈が立ちはだかっている。東方下郡との境は妙体山・高越山など、南方は剣山など、高知県境には三嶺<sup>みうね</sup>など、西方は野鹿池山<sup>のかのいけやま</sup>など、20以上の1,000m以上の山が境界線をつくっている。そのうえ地域内に1,000mを超える山が10以上ある。これが上郡に住む人の生活の場であった。急坂を毎日登り下りする。それが山の人の生活であった。村々をまわっているうちに山の人から「なれたら山道の方が歩きやすい。平らな道は気が疲れる」と聞いたことがある。その動作が峠型の使用を楽にしているのかもしれない。先に井川町の萩原さんに教えてもらった「峠型からうす」を踏む図を書いて重ね合せてみると、何だかわかるような気がする（図7）。峠型は杵を上げる時も下ろすときも、坂道を歩く動作に似て、あまり力を入れているようには見えない。平地型からうすです杵を上げる時はもちろん体形を前かがみにして前足に力を掛け、杵を落下させた時も、次の動作のためつま先は待機している

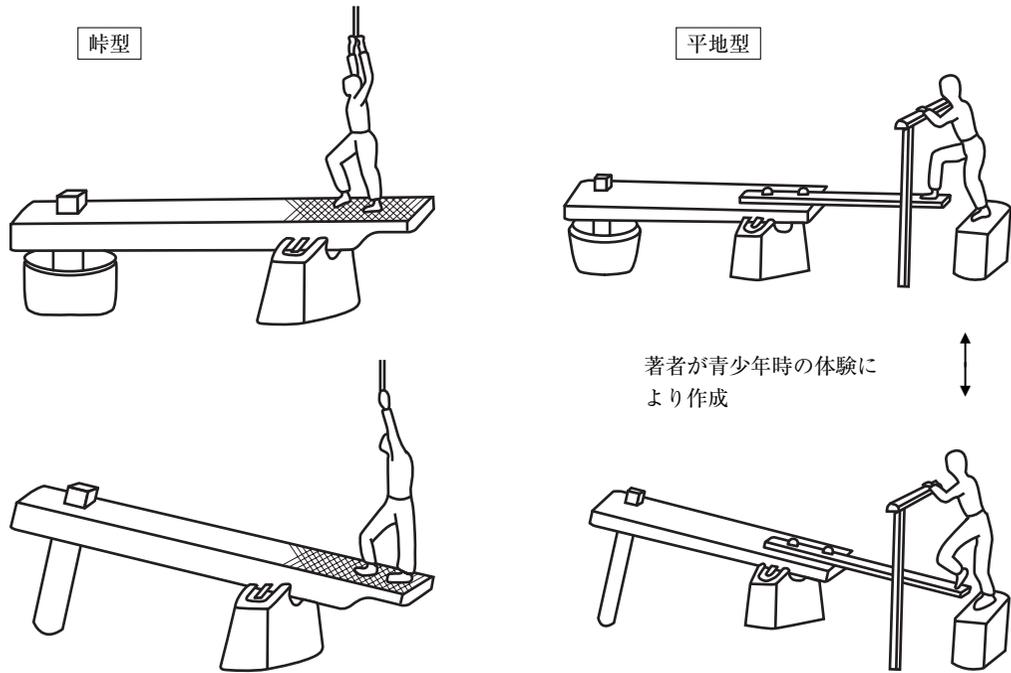


図7 峠型と平地型の体型の差

ように見える。峠型からうすは阿波上郡のけわしい山岳地帯の生活の中で作り出されたと考える。

峠型からうすの祖型については、中国の前漢時代に、1969年河南省出土のもの（図8）がある。

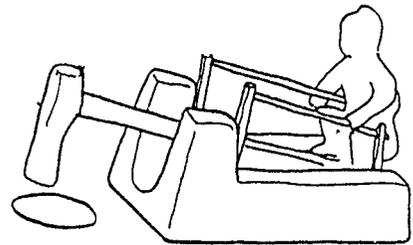


図8 前漢時代の土器模型  
(1969年河南省で出土)

## 5. 「神山町」のからうす

平成11年12月5日の調査報告会の後で、神山町の文化財関係の方から神山町の奥地に峠型からうすが1基現在も残っているとの話が出た。町文化財保護審議会の御尽力で所有者との連絡もついで、平成12年1月30日、元町文化財保護審議会委員長の大栗玲造氏と教育委員会の林徳夫氏が車でご案内下さって鮎喰川あくいに沿ってさかのぼり、神山町上分字殿宮71番地田浦善子さん（67歳）方に着いた。付近にはまだ残雪もあったが、からうすはきれいに取がかづけてあり、一人ではとても来られない所と感謝しながら、はじめて見る峠型からうすの真の構造を調査した（図9）。田浦さんは昭和8年（1993）1月2日生まれで、昭和28年（1953）に20歳の時嫁にきたという。そのころまで使っていたが、石油発動機が入ってきて、からうすを使わなくなったという。

からうすをいつごろから使っていたかについては確証がない。万葉集、源氏物語（夕顔）

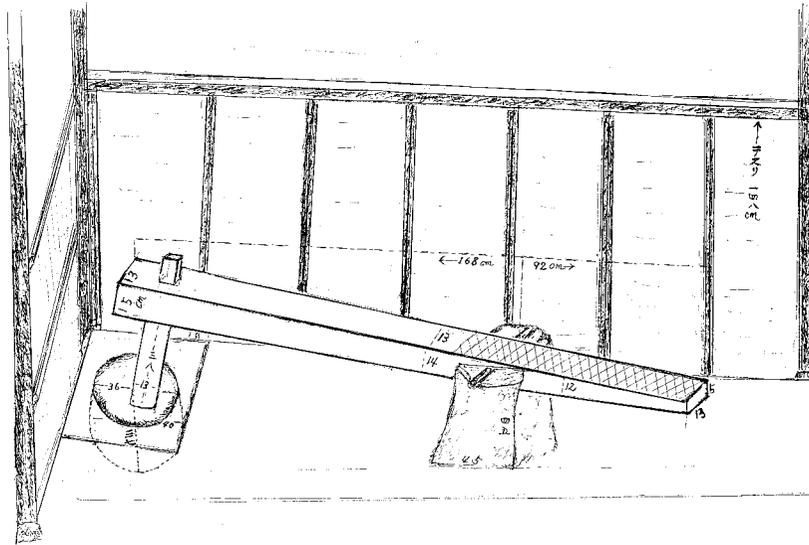


図9 神山町のからうす

にも記事があるので古代から盛んに使われていたことが知られるが、それは貴人のことであって、「庶民がからうすを踏んだのは江戸時代になってからだ」と言う学者の説が有力である。そこに大きな間違いがある。からうすの音を聞いたのは貴人であってもからうすを踏むのは庶民であった。古代人の生活を考えると、古代は数千年前の昔から個人生活でなく、社会的集団生活であった。地域ごとに特定の支配者が居り、その支配者の指示によって住民の役割りがきめられ、生産的にも、対社会的にもその地域の発展がはかられたと考えられる。逆にいえば、すべての民俗行事や、民具類が江戸時代になってから、中国から伝えられたり、行事がさかんになったと考える学者が多いのは、検地帳や棟付帳によって知られる庶民の身分制度や、貨幣経済の発達によって個人資産が蓄積したことが知られているためと考えられる。これからは文化財の中でも中世遺物に注目しなければならない。神山町のからうすは、このような中世と近世の文化の流れの違いを教えてくれる。

## 6. 文化の道

中世の社会的集団生活は、山の峰・峠をたどり、文化の交流も移動も行われた。川舟が物資の交流や人の交通に役立つようになるのは江戸時代からであろう。

中央構造線が吉野川に沿って走るこの地帯は、全体が破碎地帯で、地すべり等の災害もあったが、植物・動物は豊富で生活はしやすかった。縄文・弥生ごろからこの地域に住みついた古代人は、讃岐山脈を越えて讃岐塩を入手し、サヌカイト原石を手に入れて石器をつくり、山岳を平地のように駆けめぐって、平地よりも早くから中央政権と交流し、文化をとりいれていたことは遺跡表（表1）で示す通りである。中世まで文化の道は平地では

なく峠道であった。神山町<sup>そうやま</sup>左右山の銅剣もそうであり、平家の落人伝説、南北朝の山岳武士の活躍の舞台も、峠道であった。峠型からうすについては「神山町にはまだほかにもあるかも知れない」という声もある。

表1 徳島県・先土器・縄文期遺跡地名表

時代	遺跡名	場所	説明
○	先土器	丹田	三好郡三加茂町丹田 ナイフ形石器標高300 <sup>㍎</sup>
○	〃	土取	三好郡三好町土取 ナイフ形石器横型
□	〃	甘枝	阿南市桑野 ナイフ形石器縦型・横型
△	〃	吉野川北岸	吉野川北岸9カ所 阿波町4(地区)・市場町2・土成町2
△	縄文草創	長原	麻植郡鴨島町敷地 有舌尖頭器(類似石器由岐町など県内7カ所出土)
○	縄文早期	加茂谷川遺跡群 5号岩陰	三加茂町西ノ庄 黄嶋式楕円及び山形の押型文。標高496 <sup>㍎</sup>
□	〃	古谷岩陰	上那賀町字堂見谷 黄嶋式右同じ。標高260 <sup>㍎</sup>
○	縄文初期	加茂谷川遺跡群	三加茂町西ノ庄小松 加茂谷Z・磯ノ森式。標高340 <sup>㍎</sup>
○	〃	〃2号岩陰	〃 羽嶋下層2～3式。標高355 <sup>㍎</sup>
○	縄文前期	加茂谷川岩陰	〃 北白川下層式
○	縄文中期	加茂谷川1号岩陰	〃 中期前半、中期後半(加茂谷1・加茂谷2)
△	〃	森崎貝塚	鳴門市森崎 中期前半、中期後半標高4～5 <sup>㍎</sup> (森崎下層)
△	縄文後期	城山3号貝塚	徳島市徳島町城ノ内 宮滝式(近畿西日本に多い)標高3 <sup>㍎</sup>
△	〃	東禅寺	鴨島町西麻植檀ノ原 中津・彦崎K彦崎K式。標高20 <sup>㍎</sup> 円形住居址
○	〃	加茂谷川1号岩陰	三加茂町西ノ庄 中津・彦崎K式。標高340 <sup>㍎</sup>
○	〃	大柿	三好郡三好町昼間 中津式。標高82.5 <sup>㍎</sup>
○	〃	ウエノ	三好郡池田町ウエノ 福田K式。標高130 <sup>㍎</sup>
△	〃	森崎貝塚	鳴門市森崎 中津・彦崎K式。標高4～5 <sup>㍎</sup>
△	縄文晩期	城山3号貝塚	徳島市徳島町城ノ内 黒土B・B・滋賀里IV式。標高3 <sup>㍎</sup>
○	〃	加茂谷川1号岩陰	三加茂町西ノ庄 黒土B式。標高340 <sup>㍎</sup>

○上郡(かみごおり) △下郡(しもごおり) □南方(みなみがた)

[斎藤忠編「日本考古学の視点」(1966, 日本書籍)]

## 参考文献

1. 青木幾男(1993)『『からうす』の構造からみる三好町の文化圏』総合学術調査報告 三好町郷土研究発表会紀要第39号
2. 寺島良安編(1712)『和漢三才図会』(縮刷版・明治39年11月21日, 吉川弘文館発行)
3. 上田万年編(1917)『大字典』
4. 青木幾男(1998)「民具を通して見る社会の変遷」総合学術調査報告 井川町 阿波学会紀要第44号
5. 青木幾男(1999)「からうす、土あげの調査から見た阿波上郡文化の特徴」総合学術調査報告 穴吹町 阿波学会紀要第45号
6. 徳島新聞社調査事業局編(1981)『徳島県百科事典』徳島新聞社発行
7. 青木幾男(1999)「阿波上郡のからうす」総合学術調査発表会資料